里川文化塾

詳細はHPで公開しています。
http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/

里山や里海だけではなく、暮らしとかかわるすべての水循環の経路を私たちのセンターでは「里川」と呼んでいます。いろいろな里川を発見しその価値を身近に感じたい！　ということで、2011年度からスタートした〈里川文化塾〉。2012年度は「二ヶ領用水ワークショップ」（5月26日）と「龍と亀」（6月21日）を行ないました。
「『水の防災プログラム』をつくるためのワークショップ」（7月30日）、「浦安の震災と上下水のワークショップ」（9月15日）が予定されています。

二ヶ領用水ワークショップ

会期：2012年5月26日(土)　9：30〜15：30
集合：JR南武線「武蔵溝ノ口駅」改札口　会場：二ヶ領せせらぎ館（神奈川県川崎市多摩区）
プログラムリーダー：**前川太一郎**　ライター・編集者
講師：**齋藤 光正**さん　NPO法人多摩川エコミュージアム理事／たま・エコPJ会員
講師：**吉田 威一郎**さん　久地円筒分水サポートクラブ／全国円筒分水サミット実行委員長／高津区市民健康の森を育てる会
講師：**鈴木 眞智子**さん　NPO法人多摩川エコミュージアム理事・事務局長／とどろき水辺の楽校 代表幹事

二ヶ領用水は、江戸時代初期に徳川家康の命を受けた小泉次大夫が指揮をとり、1611年（慶長16）に竣工した南関東最古の用水路です。地域農民の協力を得て、着工から完成まで14年もの歳月を費やしました。多摩川対岸にある六郷用水（世田谷区〜大田区）とともに開削したため、「四ヶ領用水」とも呼ばれています。

川崎市多摩区の上河原と宿河原で多摩川の水を堰入れ、市域の平地を灌漑した二ヶ領用水は、名産・稲毛米を育み、豊かな穀倉地帯を生み出しました。農業用水だけでなく飲み水などの生活用水、さらには工業用水に使われ、多摩川西部の都市発展に大いに貢献しました。現在、残された幹線水路は環境用水として保全され、幼い子どもたちにとって多摩川で泳ぐ前の訓練の場になったそうです。

各所で親水化が進められ、市民の憩いの場として使われているほか、用水路沿いに点在する生産緑地では今も農業が営まれ、地域住民に新鮮な野菜を提供しています。

溝の口駅・武蔵溝ノ口駅を出発、久地円筒分水を経て宿河原堰までの約4㎞を歩き、江戸時代以降の都市の発展と人の暮らし、水との関係を辿りました。

龍と亀 日本の治水術と中国の治水史

会期：2012年6月21日（木）13：00〜17：15
会場：ミツカンフォーラム（東京都中央区）
プログラムリーダー：**賀川一枝**　ミツカン水の文化センター 機関誌『水の文化』編集長
講師：**蜂屋 邦夫**さん　東京大学名誉教授
講師：**島谷 幸宏**さん　九州大学大学院教授

今に伝わる数々の〈水の伝説〉には、人が川と折り合いをつけながら暮らしてきた知恵が詰まっています。治水の妨げになるものをいかに克服してきたか、というヒントが隠れているようにも思います。その象徴として、龍と亀を取り上げました。

当時、先進技術を持っていた大陸・中国の水にまつわる伝説や文献を蜂屋邦夫さんにひもといていただき、日本の河川工学の専門家である島谷幸宏さんとのscience meets history and culture の化学反応を楽しもう、という新たな試みは、ぶっつけ本番の緊張感を生み出しました。

中国古代の夏王朝の初代皇帝であった禹は疏方式を採用して黄河を治め、その父である鯀は塞ぐ治水を採用して五行を乱した、とされます。これによって治水の王道は長らく禹の疏方式とされてきましたが、清代の陳★【三水十黄】（ちんこう）や★【革十斤】輔（きんぽ）の治水には、「膨張時は分流させて勢いを殺ぎ、平時は合流させて沙を攻める」という鯀方式への回帰がうかがえます。

九州・佐賀の嘉瀬川に、戦国武将 成富兵庫重安がつくった分水施設〈石井樋〉は、2005年（平成17）に復元されましたが、そこにも亀の跡があったそうです。復元に尽力した島谷さんは、「ぶつけることでエネルギーを消散させるのが亀の働き。治水・利水技術が一体化していない現在においては、あまり意識されなくなった技術だが、環境の技術として復活する可能性は大きく、注目していきたい」と語りました。

それを受けて蜂屋さんは、「五行思想では、亀は玄武であり、北、水、黒のシンボル。龍には九つの子どもがいてその内の一つは贔屭（ひき）と呼ばれ、見た目は亀そっくりで、重たいものを背負うのを好む、とされます」と解説、現代社会の閉塞感を亀が背負ってくれるような期待を抱きました。

戦国時代に飛躍的に発展した日本の治水術。その伝播は中国・明からと推測はされますが、はっきりした文献などは見つかっていません。このミッシングリンクを見出すためにも、このように領域を超え、時空を超えて、未来のあるべき川の姿を一緒に探っていくことを大切にしていきたいと思いました。

■水の文化42号予告

特集「都市の暮らしを支える水」(仮)

暮らしに欠かせない水は、どこから来て、どこに行くのか。国連は2005年からの10年を「〈命のための水〉国際の10年」と定めています。持続可能な水の利用方法を探るために、その道筋をたどり、大きな水循環を明らかにします。

水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。
ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

http://www.mizu.gr.jp/

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。
すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

ホームページの充実に努めています

当センターのホームページが昨年、フルリニューアルいたしました。知りたい情報にたどり着きやすくすることを心がけ、ウェブならではのコンテンツも新設しています。新しくなったホームページ、どうぞご高覧ください。

編集後記

◆和紙を取材させて頂き、常に感じたのは歴史でした。由来、製法、使われ方いずれにも。一方、この素敵な素材の現状は厳しいといわれますが、環境変化に対応しながら未来に向けて頑張ってほしいと、微力ながら和紙を生活に少し取り入れ始めました。(宮)

◆和紙の現状を思うに、産地や生産量の衰退に対して、今後の活路を見出す術が実感できないのは何故なのか。考えるに「暮らし」や「生活」になじんだ和紙の実態を経験していないことに気づいた。和紙の魅力を実感できる、新しい用途や使い道を普及させることも必要だ。(新)

◆和紙というと高校の修学旅行を思い出す。唐招提寺で、古式ゆかしい文様が入った和紙のレターセットを購入し、大切に使用してきた。和紙にはそんな特別感がある。しかし家から襖も障子もなくなった今、和紙は生活から遠くなってしまった…。まずは虎の子のレターセットを日常使いするところから、距離を縮めてみようか。(松)

◆確か、ベトナムを旅行したときだっただろうか、雑貨類を買うと、どこのお店でもシンプルな和紙の手提げ袋に入れてくれた。味わいのあるその和紙の紙袋が気に入って雑貨より長く使い続けた記憶がある。アジアの和紙も気にかかる。(ゆ)

◆今号から取材に加わることになり、暮らしの中で「水」をより意識するようになりました。手始めに合成洗剤をやめ、重曹、クエン酸に粉石けんを使うように。和紙の里今立の透明な水を思いつつ、日々ムクムクと石けんを泡立てています。(麻)

◆祖母が茶道をやっていたので、障子や掛け軸、懐紙など、子どもの頃は和紙に触れる機会が多かった。あれは貴重な経験だったのだなあと、今しみじみ考える。今度は自分が、和紙の魅力を甥や姪に伝えよう。次の帰省のお土産は、和紙を使ったものにしようか。(原)

◆千年以上も続く歴史の中では、大きな困難が幾度もあったはず。それらを乗り越えてきたのは技術や仕組みを常にイノベーションしてきた産地のパワーではないだろうか。生活様式が激変した今の時代においてもそんな底力に期待したい。(力)

◆ペーパーレスが提唱されながら、身の回りに洋紙があふれている。一方、使いながら守りたい和紙はペーパーレス状態に。「大切だ」と言いながら、価格だけに価値が置かれているのは節水意識と同じ。この価値観をどうにかしなくては。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌
水の文化
第41号

ホームページアドレス
http: //www.mizu.gr.jp/

※ 禁無断転載複写

発行日	2012年（平成24）7月
企画協力	沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授 古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会 島谷幸宏 九州大学工学研究院教授 陣内秀信 法政大学教授 鳥越皓之 早稲田大学教授
客員主幹研究員	中庭光彦 多摩大学准教授
制作	宮崎真次　新美敏之　松本裕佳　小林夕夏　原田朱野
編集製作	賀川一枝 編集長　小野田麻里　中野公力　賀川督明 撮影・デザイン
発行	ミツカン水の文化センター 〒104 - 0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中埜ビル9F 株式会社ミツカングループ本社 Tel. 03 (3555) 2607　Fax. 03 (3297) 8578
お問い合わせ	ミツカン水の文化センター 事務局 〒104-0043 東京都中央区湊3-4-10 レジディア10F Tel. 03 (3552) 7504　Fax. 03 (3552) 7506